

中将姫説話の近世演劇化

——土佐浄瑠璃「中将姫」を中心にして——

鳥居フミ子

中将姫説話が江戸時代にどのように演劇化されていたかを、土佐浄瑠璃「中将姫」を中心にして考えてみたい。

中将姫は当麻寺の曼陀羅の制作者として鎌倉時代以来喧伝されてきた女性である。その説話は、縁起・絵解き・絵巻などとなつて、当麻寺の宣伝に一役を担って、大衆の間に根を下ろしていった。中世においては、物語化されてお伽草子となり、さらにこれが劇化されて、能にも作られている。江戸時代を迎えて、中将姫説話は、歌舞伎や浄瑠璃に仕組まれて、変貌しながら大衆の中に浸透していったのである。その変貌の様相に、中世説話の近世演劇化の実態を跡づけることができるように思われる。

一 中将姫説話の成立と演劇化

中将姫説話は、奈良県当麻寺に所蔵される曼陀羅の縁起を語るものとして成立した。

当麻曼陀羅の縁起譚が記録に見られる最初は、鎌倉時代建久三年（一一九二）に書かれた「建久御巡礼記」^{注1}である。ここでは、

麻呂子親王夫人が浄土を当麻寺に移して往生の縁としたいと念じたところ、天平宝字七年（七六三）六月二十三日に化人がきて蓮糸で浄土変相を織って夫人に与えて去った、と記している。この話に対して、筆者実叡は、麻呂子夫人と天平宝字七年では年代が合わないことを指摘し、次のような当麻寺の僧の談を付加している。すなわち、横佩大納言の娘が願を立て、一化人がきて、一夜に曼陀羅を織り上げて去った。娘はこの曼陀羅にむかつて行いすまし、極楽往生をとげたというのである。

麻呂子夫人の説は、当麻寺の飛鳥時代創建の縁起にひかれて出た説で、年代があわないために早く消え、当麻曼陀羅の縁起譚は専ら横佩大納言の娘を主役にして展開していくことになる。

この後、寛喜三年（一二三二）書与の「当麻寺流記」^{注2}に曼陀羅

縁起が大きくとりあげられて、中将姫説話の定型をなすに至る。それには次のようにある。

正二位横佩右大臣^{まさむね}尹統の息女中将が、称讃浄土經一千巻を書写して、天平宝字七年六月十五日に出家し、生身の弥陀を見奉らんと発願し、六日めに尼公がきて浄土の変相をみせようと云って蓮茎百駄を用意させる。姫の請により、朝廷は近国に宣旨を下し、九十駄を用意する。尼公が蓮糸を水につけると五色に染まる。一女人がきて、三時の間に方一丈五尺の曼陀羅を織る。尼公は姫に曼陀羅を説明し、四句の偈を残して西方に去る。姫は曼陀羅の前で行を積み、宝龜六年三月十四日に、瑞氣満つる中に往生する。

ここに至って、中将姫説話が女人往生の物語として成立したのである。この後、これと同型の多くの縁起が作成されるようになり、当麻寺の重要な縁起譚として説経や絵解き、唱導にも語られて一般に流布し、有名になっていくことになる。^{注3}曼陀羅本願の姫については、「建久御巡礼記」では「横佩大納言の娘」とし、建長六年（一二五四）成立の「古今著聞集」は「横佩大臣鐘愛の女」、あるいは「本願禪尼」というだけで名前を示していない。「当麻寺流記」では「中将」と記され、この後「中将の姫」「中将内侍」「中将局」などとも呼ばれ、しだいに中将姫という呼称が定着す

るようになる。^{注4}また、父は横佩大納言または横佩右大臣、名を尹統または尹胤とされているが、弘長二年（一二六二）成立の禅林寺本「和州当麻寺極楽曼陀羅縁起」に至って、実在の藤原豊成の名が用いられ、以後、姫の父はこの豊成に定着することになるのである。^{注5}

室町時代の曼陀羅講説・談義の唱導本の性格を持つ「当麻曼陀羅疏」（永享八年一四三六）では、中将姫が当麻寺において出家する以前の生涯についての詳しい叙述が現われる。長谷観音の申し子として生まれた藤原豊成の娘中将姫は、母と死別し、橘諸兄の姫を継母に迎える。継母は姫を憎み、姫十四歳のとき武士に命じて、^{ひばりやま}鶴山において姫を殺させようとする。武士は憐れんで姫を救い、その妻が山中で育てる。翌年姫は狩りに赴いた父豊成にめぐりあい、内裏に入ることになるが、世の無常を悟って当麻寺に入り、翌年出家して曼陀羅を織る、というのである。ここで、成立期の中将姫説話においてはふれられていなかった継子いじめ譚が付加されたことが、中将姫説話の大きな展開として注目される。慶長十九年（一六一四）に稿の成った「当曼白記」では、曼陀羅を織る話よりは、姫の実母との死別、継母による鶴山流罪物語の方が詳しく述べられていて、談義の重点が姫の出家の動機の方に移っていったことを知る事ができる。^{注6}めぐまれた環境の姫が

発心する理由として、ただ信仰心によるとするだけでは説得力に欠けるので、実母の死・継母の憎しみなどのドラマティックな要素が加えられ、強調されていたのである。

「当麻曼陀羅疏」をもとにして室町時代物語「中将姫物語」が成立する。「中将姫物語」には数種の伝本があり、^{注7}内容に多少の違いがあるが、物語の構成要素は大体同じである。継母の悪計により、姫は鶴山に流されて殺害されることになるが、忠臣に助けられて父に再会する。継母の浅ましきを見せられた姫は俗界を厭離して出家し、当麻寺において化女の助けにより曼陀羅を織り上げて往生する、という構成要素を持つのである。

「中将姫物語」において、中将姫の本説につけ加えられた継母の讒言から山中遺棄に至る継子虐待の話は、中世小説に一般化されていた継子いじめ譚の典型である。^{注8}それは「箱根権現絵巻」や「はこねの御本地」のように、継子譚が寺社縁起に結びついていく現象とも連なるものである。^{注9}一夫多妻制から一夫一婦制へと進んできた中世の家族制度の中では、継子の処遇をめぐる話が、日常起り得る深刻な社会現象として多くの人々の共感を集めたのである。

このような継子いじめ譚の付加された「中将姫物語」の劇化は、まず、室町時代末期に世阿弥によってとりあげられた。能「当麻」

と「雲雀山」である。^{注10}

「当麻」は、三熊野歸りの僧の求めに応じて前ジテが当麻寺の案内をし、中将姫が後ジテとなって現われ、当麻曼陀羅織成から往生までを物語る。中将姫説話の本説を扱ったものである。

「雲雀山」では、継母の讒言によって雲雀山に捨てられて暗殺されようとした中将姫は従者に助けられ、乳母侍従は草花を里人に売って姫を養育する。父豊成は雲雀山にきて物狂いの乳母に逢い、姫の無事を知る。父と姫は再会して共に奈良に歸ることになる、という内容を物狂能の構成によって扱ったものである。「中将姫物語」では単なる脇役にすぎなかった忠臣の女房を独立させて乳母とし、乳母の物狂を契機として父子の邂逅が果たされるということになっている。中将姫を護る乳母が登場しているのは世阿弥の工夫であったと考えられる。

能には「当麻」「雲雀山」の二作の他に、これよりやや遅れて成立したと考えられる「中将姫」（古典文庫『末刊謡曲集』六所収）がある。この作は、「当麻」「雲雀山」を下敷きにして、中将姫の一代記風に作られたものである。『末刊謡曲集』六の解題にもあるように、あまりすぐれた曲ではなく、上演されることも少なかったようである。諸記録の「中将姫」上演の記録は、「中将姫」と記されていてもむしろ世阿弥作「当麻」か「雲雀山」をさ

すものと理解すべきもののように思われる。^{注11}

江戸時代に入って、中将姫は浄瑠璃や歌舞伎の取り上げるところとなるが、「雲雀山」の方向に、「当麻」の内容を包み込む形で展開していくことになるのである。

二 古浄瑠璃「中将姫之御本地」

室町時代に、当麻曼陀羅縁起に継子いじめ譚が付加されて流布した中将姫説話は、江戸時代に入ると、浄瑠璃や歌舞伎に劇化されて大衆の中に浸透していくことになる。まず古浄瑠璃からみることにする。

中将姫を扱った古浄瑠璃には次の正本がある。

- ① 中将姫之御本地 延宝三年刊 旧赤木文庫蔵
 - ② 中将姫御本地 延宝五年刊 旧古鞆文庫蔵
 - ③ “ 刊年なし 大東急記念文庫蔵
 - ④ 中将姫之御本地 寛文九年刊 東北大学附属図書館蔵
- (出羽掾正本)

『古浄瑠璃正本集』第五の解題によれば、②は①と同内容、③は①の後印本、④は①を踏襲したもので同内容である。したがって、現在知られている中将姫に関する古浄瑠璃の諸正本は、ほとんど同内容といえることができる。これらの中から出羽掾正本「中

将姫之御本地」によって内容をみることにする。

◇ 中将姫之御本地 (出羽掾正本 寛文九年刊)

第一 長谷観音の申し子中将姫は三歳にして生母に死別し、十三歳で継母をむかえ、孝養をつくす。

三条藏人頼実(頼実)は姫に懸想して執拗に求婚する。豊成の家臣伊藤春時の子久米八郎は頼実の館へ出かけて、頼実の郎等をこらしめる。

第二 吉野へ花見に行った豊成一行を頼実が三百余騎で襲う。春時親子が奮戦してこれを討ちとる。

第三 継母が姫の不義を讒言するので豊成は姫を討つように春時に命じる。

春時は姫を雲雀山につれていき、妻子と庵を結んで姫に仕える。

第四 豊成は雲雀山に狩して姫に逢い、姫をつれ戻す。

姫に入内の勅諭があるが、姫は当麻寺に入って剃髪し、その願によって蓮糸の曼陀羅が織られる。

第五 阿弥陀の化身である尼公は曼陀羅の功德を説き、十三年後に姫を迎えるといつて去る。約束の日には姫は往生して女人成仏の証しをたてる。

出羽掾正本「中将姫之御本地」の中将姫説話から発展している主な点について考えてみよう。

まず第一に、合戦の場面が新たに設けられていることが注目される。姫に懸想した頼実が姫に求婚して断られ、それを遺恨として父豊成を襲い、戦闘になる。豊成の忠臣伊藤春時・久米八郎光春父子が頼実の軍勢三百余騎に応戦して散々に打ちまかし、頼実の首を打ち落す。この戦闘場面が第二の全体にくり展げられて見せ場になっているのである。

求婚を断られた者が遺恨をはらすために軍勢を以って攻め、戦闘場面が展開されるという脚色は、古浄瑠璃にはよく見られる常套的なものである。戦闘場面が二段めに置かれているのも、古浄瑠璃の一般的な手法である。^{注12}それは、長い戦国の時代が終結し、武士を支配階級として形成されていた近世初期社会の人々の歓迎した場面であった。中将姫説話は、継子いじめの要素にさらに合戦の要素を付加することになったのである。

古浄瑠璃「中将姫之御本地」では、求婚と継子いじめとは無関係に進行している。継母は求婚譚にはかわりを持っていないのである。この両者がからみ合ったとき、より複雑な劇構成が成立することになる。中将姫説話に合戦という異質な見せ場を付加した古浄瑠璃は、説話から近世演劇への出発を意味するものであ

たということができようであろう。

第二の特色として、豊成の臣春時父子の忠節ぶりが強調されている点をあげることができる。春時は、中将姫を討つように命ぜられて姫を雲雀山に連れていくが、主君の姫を討つことができず、妻と共に庵を結んで姫に仕える。このような豊成の臣下の忠節は、能「雲雀山」でも扱われて一般の人々に親しまれていた場面であるが、古浄瑠璃ではそれを三段めの全体に扱って、見せ場になっているのである。

第三の特色として、曲尾の中将姫往生の場のからくり応用の見せ場をあげることができる。往生に際して、蓮台上の姫は黄金に姿を交じる。阿弥陀如来をはじめ三世十方の仏菩薩が来迎し、管絃を奏しつつ、姫を極楽浄土へ招引する。女人往生の不可思議な世界を観客の眼前に現出させてみせているのである。からくりを用いて観客の視覚・聴覚に直接訴え、一大スペクタクルを展開しているのである。

このように、中将姫説話では単なる説明的場面であったものが、ここでは現実世界の出来事として眼前に展開することになる。それは、能のもたらす夢幻世界への陶醉とは違って、より確かな現実感を持って人々の心を奪うのである。ここに、中将姫説話の現実化・近世化の様相をみることができるのである。

中将姫説話は、江戸時代初期において、古浄瑠璃と並んで説経浄瑠璃でも好題材としてとりあげられていたものと思われる。しかし、その詞章を伝える正本はほとんど現存していない。現在知られているものは大阪大学附属図書館所蔵「中将姫之御本地」(赤木文庫旧蔵、『説経正本集』第三所収)一本のようである。この「中将姫之御本地」は刊記に「大伝馬三丁目鱗形屋孫兵衛新板」とある。所属太夫、刊年などは記されていないが、万治から元禄初年まで江戸で活躍した天満八太夫^{注13}の正本と考えられる。正本の形態から、天満八太夫の所謂鱗形屋半紙本シリーズの一本と考えられ^{注14}、元禄頃^{注15}の天満八太夫正本として間違いないように思われる。

この作では、継母は中将姫入内の勅詔に嫉妬して姫の父豊成に讒言し、姫を殺させようとする。豊成の命を受けた経春は、姫を殺さず、雲雀山で妻子と共に姫を養育するが、豊成の討手を受けて討死してしまう。三段めに合戦の場面が展開して忠臣経春が活躍する。この戦闘場面の趣向は古浄瑠璃と同様であるが、合戦の原因を求婚拒否への遺恨とせず、継母の讒言によるとした点に特色がある。説経浄瑠璃の中に合戦の場を設けることは万治頃からみられる一般的傾向で、説経が古浄瑠璃から学んだ脚色法であるが、「中将姫之御本地」では、合戦の原因について讒言を持ち込んできた点が、古浄瑠璃の中将姫ものからの展開である。後の

浄瑠璃では、継母は讒言のために種々の計略を用いることになり、それがからくりによる見せ場となるのである。

父に再会した姫が連れ戻された後、継母は孤立して身の置き所がなくなり、入水自殺する。姫は継母の浅ましさに菩提心を起し、入内の勅詔を機に当麻寺に入って出家する。中将姫は阿弥陀の加護により曼陀羅織成の大願を果たす。中将姫往生の前日の説法に、継母は大蛇となって現われるが姫の念仏によって仏果を得る。中将姫は弥陀三尊に導かれ、菩薩に護られて往生を遂げる。姫の菩提心を継母の浅ましき故とし、大蛇となった継母が姫の念仏によって仏果を得ることにしているなど、説経浄瑠璃は継母の存在を強調している点に特色を認めることができる。

説経浄瑠璃は盛んに語られ、この正本に先行する正本も多くあったと考えられる。その場合に、説経浄瑠璃は継子いじめと女人往生という構成によって演じられたのであろう。古浄瑠璃とは系統を異にしつつ、近世初期を迎えて古浄瑠璃の影響を受け、説経浄瑠璃「中将姫之御本地」に見られるように合戦の場面をもとり入れて、古浄瑠璃に接近していったものと考えられるのである。

三 歌舞伎「当麻中将姫まんだらの由来」

中将姫説話は江戸時代に入って歌舞伎にも上演されるようになる

った。歌舞伎は、元禄期にむけて、娯楽性を基盤としながらしだいに劇的展開をそなえた戯曲構成を持つようになっていった。中将姫を扱った歌舞伎においては、中将姫説話の持っていた当麻曼陀羅縁起は宗教的性格を娯楽的な見せ場に変質し、継子いじめの要素はお家騒動ものの中にとり込まれることになる。

中将姫を扱った歌舞伎は、元禄期にむけて江戸や上方でしばしば上演されたと考えられる。度々行われた当麻中将姫御影の出開帳などにあわせて中将姫は上演され、人々に歓迎されたものと考えられる。^{注16}現在残されている中将姫関係の歌舞伎上演の記録によってもその盛況ぶりをうかがうことができるのである。

近世初期（貞享・宝永）における歌舞伎による中将姫関係上演の主なものは次のようである。

。中将姫 三番続 貞享三年 大坂荒木座 難波立聞昔語

。当麻のまんだら 元禄四年 大坂角芝居

藤十郎の中将姫 歌舞伎年表

。当麻万燈供養 元禄五年二の替り 京村山平右衛門座

坂田藤十郎の傾城事大当り 歌舞伎年表

。中将姫 元禄七年四月 江戸中村勘三郎の芝居

^{注17} 日乗上人日記

。当麻中将姫まんだらの由来 元禄十一年 大坂荒木与次兵衛座

狂言本 早稲田大学演劇博物館蔵

。当麻中将姫二代記 元禄十二年二の替り 大坂荒木与次兵衛座

狂言本 大東急記念文庫蔵

。薄雪今中将姫 元禄十三年三月 江戸山村座

狂言本 東京芸術大学附属図書館蔵

（『元禄歌舞伎傑作集』上所収）

。中将姫三ツの車 宝永二年二の替り 江戸中村座 歌舞伎年表

。中将姫一枚起證 宝永三年二の替り 大坂嵐山右衛門座

中将姫（喜三郎役）下女のやつし 歌舞伎年表

。中将姫京雛（追善彼岸校） 宝永五年二月 江戸中村座

歌舞伎年表

。中将姫 正徳元年盆 江戸中村座

「釈尊みのりの段」に伝九郎の所作 歌舞伎年表

。中将姫 正徳五年二の替り 江戸森田座 歌舞伎年表

右にあげたもののうち、内容を知ることのできる最初のもの

「当麻中将姫まんだらの由来」である。狂言本によって中将姫説話歌舞伎化の様相を考えてみよう。

○当麻中将姫まんだらの由来

〔上〕 継母は実子さよ姫を入内させるために中将姫を殺そう

とする。中将姫は、中将姫と同様の境遇で継母に迫害されている少将と不義の疑いをかけられ、雲雀山に引き立てられる。

〔中〕 中将姫の父豊成の家老春時と少将の父頼実の臣久米八郎の働きにより、悪計をたくらむ中将姫の継母と少将の継母は斬られる。

〔下〕 中将姫と少将は都へ帰り、姫は当麻寺を建立し、蓮糸で曼陀羅を織り、これを妨げる継母の執念を四天王が退治する。

歌舞伎「当麻中将姫まんだらの由来」の脚色上の特色は、中将姫の妹さよ姫を登場させて活躍させた点である。継母の中将姫虐待の理由を実子を出そうとする下心のためとする。中将姫は異母妹さよ姫が少将を慕っていると知って、少将に妹の身を頼む。少将もまた中将姫と同様に継母に虐待され、殺されようとしている身の上である。さよ姫は、継母の悪心にもかかわらず姉に對して誠実を尽す。このような人物設定は、お家騒動ものとしての脚色から必然的に生じたものである。

「下」の曼陀羅織成と四天王の活躍は、狂言本では極めて簡単に事実の経過が述べられているにすぎない。しかし、見開きの挿

絵に、この場面は細かに描かれている。挿絵には、中将姫が曼陀羅を織る周りを、天人が樂器を携えて舞い奏でており、悪鬼となって現われた継母に、持国天・増長天・広目天・多聞天がたちむかって退治しようとしている。天女や四天王を観客の眼前に出現させて観客の歓心をあつめつつ結末としたものと考えられるのである。

このように「当麻中将姫まんだらの由来」は、その脚色面において、中将姫説話へのお家騒動ものの導入という点で、新たな展開をみせたのである。この後の浄瑠璃、歌舞伎の中将姫ものは、このお家騒動の脚色の方向に複雑化していくことになるのである。

「当麻中将姫二代記」は、中将姫の妹さよ姫が主人公となって、後日譚が脚色される。「薄雪今中将姫」は当時流行の「薄雪」の世界に中将姫説話をはめ込んだものである。これらの歌舞伎では題名に「中将姫」の呼称を残しつつ、テーマを複雑なお家騒動に移して、中将姫説話拡散の方向にむかっていくことになるのである。

四 土佐浄瑠璃「中将姫」

土佐浄瑠璃「中将姫」は、正本の扉に宝永五年の刊記がある。上演記録や所収段物集によっては、この宝永五年以前にさかのぼ

ることはできない。^{注18} 木下版土佐浄瑠璃正本に貼付されている六段物出来合目録には二十番めに、「和国女眉間尺」のあと、「三世二河白道」の前に記されているので、この両作とはほぼ同じ頃に刊行されたものと考えられる。^{注19} 内容からみても、初代土佐少掾の晩年、元禄末年頃のものである。

「中将姫」の内容は次のようである。

○中将姫（土佐少掾正本）

〔第一〕 宰相清川は鶯取りに出て許婚中将姫の異母妹玉姫に心を惹かれる。玉姫は中将姫のいる白毫寺へ清川を導く。

老僧に扮した左大将広門は中将姫を口説くが、清川の臣久米八郎に追い払われる。

中将姫は出家の志をあかして、清川に玉姫と結婚するよう頼む。

〔第二〕 広門は姉妹の何れかを妻にと申し入れるが父豊成はこれを断る。

広門は玉姫をかくまった清川の館を攻めるが八郎らが応戦する。

〔第三〕 さまよい歩く玉姫（道行）に八郎が追いつき、清川の隠家へ案内する。

継母は人の影が牛の形となるからくりをつかって中将姫

を父豊成に讒言する。豊成は姫を殺害するように春時に命じる。

春時は継母の悪計をあばき、姫をかくまう。八郎は姫が乗せられていると思って輿を奪う。

〔第四〕 輿には姫の身代りに春時の妻、実は八郎の姉白妙が乗っていたが、八郎は春時夫婦の忠誠に感じて、中将姫の身替りに姉白妙を討つ。

中将姫は猿に導かれて山中に分け入り、玉姫と八郎にめぐり逢い、途中で春時にも逢い、一同揃って清川の隠れ家にむかう。

〔第五〕 清川は玉姫恋しさのあまり狂気になっていた（枕物狂い）が、一同に逢って喜び、共に帰京する。

八郎は玉姫を伴って豊成館へ行き、すべては御台の悪企みによること、当麻寺において中将姫が曼陀羅を織り上げたことを告げる。

継母は改心して剃髪し、清川と玉姫の婚約もとのう。

当麻寺では、練供養が行われるが、広門が練供養の面と衣裳をかなぐり捨てて、玉姫をよこせと狼藉する。

〔第六〕 当麻寺には寺領三百町を賜る。

広門が宇陀国見山に立籠るので清川に追討の命が下る。

八郎は清川を攻めて大活躍し、京へ凱旋する。

「中将姫」の脚色上の特色について考えてみよう。

まずあげられるのは、全体が中将姫物語の継子いじめの要素の発展として構成されていることである。中将姫物語の継子いじめの要素の演劇的展開をみたのは歌舞伎であった。歌舞伎では継母の実子を登場させて中将姫に対立させ、継母の策略によるお家騒動の脚色の中に中将姫の本説を展開させたのであった。本曲ではこの方向をより一層進めているのである。継母の実子を玉姫と名づけ、中将姫と並ぶ重要な人物として活躍させている。玉姫は中将姫の許婚清川を恋い慕い、継母と通じる広門が玉姫に横恋慕する。玉姫をめぐる恋争いが、中将姫の雲雀山遭難、当麻寺での曼陀羅織成から往生への本筋にからみあって展開しているのである。

次に注目されるのは、土佐浄瑠璃「中将姫」には身替りの悲劇が仕組まれていることである。豊成の忠臣春時と妻白妙は中将姫の首を討つように命ぜられて雲雀山にむかうが、姫の身替りとなる計略を考える。妻白妙は姫の駕籠に乗り、姫の身替りとなって清川の家臣八郎に討たれる。八郎は白妙の実の弟であるが、清川夫婦の忠誠に感動し、姉と知りつつ白妙の首を討つのである。このような忠臣による身替りの悲劇がこの曲のクライマックスになっているのである。

雲雀山に姫をかくまう忠臣夫婦の働きは、能「雲雀山」以来扱われてきた中将姫物語の重要なテーマであった。主君の姫を討つように命ぜられた夫婦は、姫を討つことができず、隠家に姫を護る。説経浄瑠璃「中将姫之御本地」では、忠臣は姫を奪わんとして押し寄せる軍勢と戦って討死してしまうことになっている。身命を賭して姫を護っているのである。しかし、これらの先行作には、まだ身替りの脚色はみられなかったのである。土佐浄瑠璃は、中将姫説話に身替りの趣向をとり入れることによって見せ場を作ったのである。継母の悪計によって窮地に追い込まれた中将姫は、忠臣の身替りによって救われるのであって、これによって継子いじめの脚色は一層徹底され、劇的場面を形成することになったのである。

演劇における身替りの趣向は、古く幸若舞「満仲」を嚆矢として古浄瑠璃にもしばしば仕組まれ、土佐浄瑠璃にも用いられている。^{注20}身替りの趣向の高度な悲劇的場面への昇華は「菅原伝授手習鑑」を待たなければならないが、中将姫説話の中にもとり入れられて、封建制社会における感動的な出来事として近世演劇の中に有力な座を固めていたのである。

「中将姫」の構成要素として次に注目されるのは、第四の段末に繰り広げられる練供養の場面である。中将姫によって曼陀羅が

織られたことが知らされ、当麻寺の練供養となる。

先第一の観世音。^{ギンノリ}ぼだいらくのでうしを取、^{本フシ}何かは露を。玉^下
^{三ツ引}とあざむくと、^{サシ入}うたはせ給へは。大せいし。^下十のれんげをが

つしやうし。手拍子合給ひけり。^{ノリ}薬王菩薩^{キン上ケ}はへいをふり、

と、二十五菩薩が音もあやな管絃の中を練り歩く。当麻寺の練供養のさまが、劇中劇の趣向となって観客の前に繰り広げられているのである。音楽によって耳を楽しませながら菩薩の練行をみせて観客の目をみはらせているのである。

当麻寺の練供養の歴史は古く、定かでない点が多いが、^{注21}寺伝によれば、元禄十三年（一七〇〇）に復活したと伝えられている。^{注22}

この年復活された当麻寺の練供養は、一大イベントとして世間の耳目を集めたことであろう。土佐浄瑠璃はこのイベントを当て込んで、当麻寺の練供養の様を浄瑠璃の中に持ち込んだものと考えられるのである。^{注23}

このようにして、土佐浄瑠璃「中将姫」においては、中将姫説話では主要な場面であった中将姫の曼陀羅織成の件りは、その成就が登場人物によってただ報告されるだけで劇的場面とはならず、それにかわって、新に当時評判の練供養が再現されることになったのである。この練供養の菩薩の中から、とつぜん仏の面と衣を取って広門が現われて狼藉を働くことになり、意外な劇展開をす

ることになっている。土佐浄瑠璃の、練供養の趣向を生かしての脚色上の工夫をみるのできるのである。^{注24}

「中将姫」の脚色上の特色としてからくりの応用による見せ場を工夫している点もあげなければならない。「中将姫」の第三は、継母の策謀によって、中将姫の牛の角の生えた姿を障子にうつす場面がある。姫は自らの姿のあさましさを悲しんで自殺しようとするが、それは継母の仕組んだトリックであったと判明する。この場面はからくりを使って演じられたもので、観客の目をたのしませ、評判を得たものと思われる。この演出は「当麻中将姫」ではさらに発展して瑠璃灯の趣向となり、中将姫ものの主要な構成要素となるのである。

「中将姫」の曲尾は、妹玉姫に執心して立籠る広門を、清川が討滅することによって大団円となる。一曲は、広門の横恋慕による叛乱を平定することで首尾一貫しているのである。このようにして、「中将姫」は、曲中に中将姫説話による見せ場を用意して観客に中将姫の物語であることを印象づけながら、玉姫をめぐる恋争いという継子いじめ譚から発展した副題をからませて劇展開を図っているのである。

五 「当麻中将姫」と「鶴山姫捨松」

土佐浄瑠璃の後、中将姫説話を扱った主な浄瑠璃として、「当麻中将姫」と「鶴山姫捨松」をあげることができる。

「当麻中将姫」は、従来作者として近松門左衛門が擬せられているが、確証をあげることにはできない。『外題年鑑』明和版では元禄九年四月十四日竹本座上演と記しているが、内容的にみてこれより年代は下るものと考えられる。『邦楽年表』では、宝永二年京で当麻曼陀羅開帳があった際の当て込みであろうとしている。内容的に元禄年代では早すぎるのでこの宝永二年上演の説に従いたい。

「当麻中将姫」は、土佐浄瑠璃に扱われた脚色内容をさらに発展させるという方向で構成されている。父豊成は中将姫と宰相清忠を結婚させて家を継がせることにしているが、継母薄雲は実子の玉姫に継がせようとして中将姫を殺そうと謀る。薄雲に心を通わす玉姫の許婚広綱が中将姫殺害のために活躍する。継母の継子いじめは、家の相続問題を表面化することになっているのである。土佐浄瑠璃「中将姫」では相続問題にふれながら戯曲構成としては求婚譚の方にウエイトがかかっていたのであったが、本曲ではこれを一步進めてお家騒動の性格を強めているのである。

継母が中将姫を陥れるために幻術の瑠璃灯をしかけるのは、土佐浄瑠璃「中将姫」で扱われた障子に牛の影を見せる趣向の発展である。また、四段めの二十五菩薩歌舞の件りは「中将姫」の練供養の箇所注25の応用である。雲雀山での身替りの趣向も「中将姫」と同工である。中将姫の許婚清忠をしたう玉姫の設定もまた「中将姫」と同様である。猿の群が幼児と中将姫を白妙の許に導くのも、「中将姫」で、隠家から行脚に出た中将姫が猿に導かれて玉姫達に逢う趣向の発展である。このように、「当麻中将姫」は土佐浄瑠璃「中将姫」を下敷きにして構成されているのである。

「当麻中将姫」の後、その改作「鶴山姫捨松」（並木宗輔作）が元文五年（一七四〇）に豊竹座で上演される。この作では中将姫説話は帝位を巡る位争いの中に仕組まれることになる。お家騒動は、よりスケールの大きな位争いの趣向に発展したのである。三段めの継母岩根御前が中将姫を拷問する雪責めの段は有名となり、この部分だけをとりあげた浄瑠璃が「中将姫古跡松こせきのまつ」の外題で行われるようになり、さらに歌舞伎に入って明治以後も改作が多く上演されている。中将姫といえはこの雪責めの場面が代表するようになるのである。

「鶴山姫捨松」では、雪責めの場の後、中将姫は鶴山に逃れ、忠臣夫婦の働きによって命を助かり、継母はかえって忠臣のため

に殺される。姫は継母の悪事を自分故と観じ、出家して当麻寺に入り、曼陀羅を織る。中将姫の父豊成の働きによって悪王は破れ、めでたい御代となるという結末になっている。継母の中将姫に対する残忍な悪計、中将姫の鶴山での遭難、忠臣の活躍、中将姫の出家、当麻寺での曼陀羅織成という劇的展開が、本作によって定型をなすことになったのである。明治十七年（一八八四）、東京春木座で上演された「雲雀山駒絆松樹」（三世河竹新七作）も、この「鶴山姫捨松」を改作したものである。

おわりに

中将姫説話の近世演劇化は、中将姫説話発生当初持っていた宗教性を捨象してこれを娯楽的な見せ場とし、中世になって付加された継子いじめの方向に劇化の工夫を重ねていったのである。継子いじめは中世説話に一般化されていた話型であったが、近世演劇ではこれを元禄歌舞伎のお家騒動ものの脚色法にとり込むことによって劇的展開を果したのであった。この方法の中に、中将姫の継母と異母妹が重要な人物として活躍することになるのである。継母の中将姫虐待、忠臣の身替り、異母妹と中将姫の許婚との恋愛などが中将姫ものの主要な構成要素となるのである。

このような中将姫ものの展開の中で、土佐浄瑠璃「中将姫」は

扇の要のような位置にあったということが出来る。土佐浄瑠璃「中将姫」は、中世の中将姫物語に準拠して語られていた古浄瑠璃中将姫ものに歌舞伎の中将姫ものもたらしめたお家騒動の手法を組み込むことによって、近世演劇としての豊かな脚色への展開点に立っているということが出来るのである。

中将姫の話は、歌舞伎や浄瑠璃の他にも、いろいろな形でとり上げられ、大衆の間に浸透し、親しまれたものと考えられる。その流行ぶりは想像以上のものであったであろう。絵解き、説経、和讃などに中将姫を扱った数多くの例をみることが出来る。近世中期には草双紙にもとり上げられ、曲亭馬琴の「鶴山後日譚」や、歌川貞秀の「雲雀山蓮糸織」などの合巻が流布するようになる。^{注26} 近世演劇の中将姫ものは、このように人々の間に育まれた中将姫説話を吸収することによって脚色面を豊かにし、また逆に、さまざまな形態の中将姫ものに題材を提供しているのである。

注

注1 「中将姫説話の調査研究報告書」（元興寺文化財研究所 昭和58年3月）による。

注2 注1に同じ。

注3 この頃成立の文献として以下のものをあげることができる。その内容はどれも「当麻寺流記」系で、ほとんど同型である。

大和国当麻寺縁起 光明寺本当麻寺縁起絵巻 古今著聞集 私
聚百因縁集 問はず語り 一遍聖絵 元亨釈書 西山上人縁起
菅家本諸寺縁起集 帝王編年記 (注1による)

注4 五来重「当麻寺縁起と中将姫説話」『文学』45巻12号 昭和52年12月)

注5 注1に同じ。

注6 注1に同じ。

注7 室町時代物語「中将姫物語」の主なもの次である。

①「中しやうひめ」 奈良絵本 広島大学文学部国語学国文学研究室蔵 『室町時代物語集』第四に翻刻 同書の解説によれば近世中期頃写。

②「中将姫本地」 板本 慶安四年八月吉日開板 東大総合図書館霞亭文庫蔵 『室町時代物語集』第四に翻刻。国会図書館本は同版であるが刊記の「開板」の文字が削られており、台湾大学所蔵本も同版であるが、刊記、「開板」の文字全部が削られている。

③「中将姫物語」 近世初期写本 刈谷市立図書館蔵
以上、①②③は大体同じ構成である。

④「異本中将姫物語」 写本 江戸初期寛永頃写 吉田幸一氏蔵

①②よりも叙述が簡略になっていて、中将姫の名は「ひめ」「ひめきみ」とあり、出家後の名は「ほう女」とあり、ただ一箇所「中将ひめ」とある。継母は十二歳になる連子があり、そのためにひめきみの入内を妨げる心を起したことになっている。(『室町時代物語集』第四の解説にある内田元夫氏蔵「異本中将姫物語」は、本書である。) このように継母に連子があつたとする話型は本書以外には見当たらない。連子が中将姫の異母妹として重要な登場人物となる近世演劇への過渡的様相を示している。

注8 「ふせやの物語」「美人くらべ」「秋月物語」「岩屋の草子」「月日の御本地」「花世の姫」「朝顔の露の宮」などがある。市古貞次著『中世小説の研究』(東京大学出版会 昭和30年)に詳しい論述がある。

注9 五来重「寺社縁起からお伽話へ」『文学』44巻9号 昭和51年9月)

注10 「能本作者注文」「二百十番謡目録」などによる。

注11 『未刊謡曲集』六(古典文庫) 解題では、栗田口尊応准后猿楽記所見の永正二年四月十三日金春大夫栗田口勸進猿楽初日初番所演の「中将姫」、享保六年観世大夫書上所載謡名寄の「中将姫」などは、「当麻」か「雲雀山」であろうとしている。

注12 拙稿「近世演劇における松風物の展開と変質」『国語と国文学』昭和62年1月号) 参照。

注13 信多純一「天満八太夫雑考」『説経正本集』第三所収)

注14 『赤本文庫(古浄瑠璃) 目録』(大阪大学附属図書館 昭和60年3月)の解題による。

注15 『説経正本集』第三の解題による。

注16 『説経正本集』第三解題に次のようにある。

「元禄六年九月には、京都と江戸で、それぞれ当麻中将姫の御影が開帳された」と年代記の類に記されてゐる。「当麻では、延宝のころ、古い曼陀羅の損傷を修理して、これを宝蔵に収めると同時に、平常は新しく作つた曼陀羅を用ひることにしたと「三才図会」などにも出てゐるから、その披露なども盛大に行はれたと思ふ。」丸西美千男「元禄期の水戸家における近世演劇の盛行」『日乗上人日記』紹介」(『芸能史研究』25号 昭和44年4月)による。

注17 拙編『土佐浄瑠璃正本集』第二解題参照。

注19

「六段物出来合目録」は初型は卅七まで記されている。「中将姫」はこの中に入っている。この後、刊行順に付加されて、「四九今川かづら」まで記されているものが最も新しい型である。

注20

拙稿「土佐浄瑠璃の脚色法（八）―身替りもの「土佐日記」の位相―」（東京女子大学紀要『論集』第三十七巻第一号 昭和61年9月）

注21

寺伝によれば、当麻寺の「聖衆来迎練供養会式」（迎講）は、平安中期、源信（恵心僧都）が寛弘元年（一〇〇四）に当麻寺に來り、当麻寺の浄土變曼陀羅に帰依し、中将姫の昔を思つて聖衆來迎の有様を現実化して見るため、來迎の本尊二十五菩薩の装束と仏面を作つて寄進したのに始まるという。関山和夫著「説教の歴史的研究」（法蔵館 昭和48年）、徳田和夫「勸進聖と社寺縁起―室町期を中心として―」（国文学研究資料館紀要 第四号 昭和53年3月）参照。

注22

注1に同じ。

注23

このことから「中将姫」の初演は元禄十三年と考えたい。

注24

土佐浄瑠璃「中将姫」の二十五菩薩練供養の詞章は、「ゑがらの平太」中のものほとんど同文であるが、多少の相違と増補がある。『外題年鑑』明和版によれば、元禄十七年正月十五日に「薩摩歌」の前浄瑠璃として「悦賀楽平太」が上演されたことになっている。しかし、これには根拠がなく、『鸚鵡籠中記』元禄五年正月二十四日に

若宮にて操り桂柄平太 笹尾太夫

とあるので、初演はこの時以前かとも考えられる。「ゑがらの平太」の初演が元禄五年以前とすると、二十五菩薩歌舞の詞章は土佐浄瑠璃「中将姫」に先行することになる。二十五菩薩の來迎会

注25

は当麻寺に限ったものではないので、迎講を語った詞章が「ゑがらの平太」に活用され、「中将姫」の練供養にも利用されたのであろう。

その詞章は「ゑがらの平太」と同文である。土佐浄瑠璃「中将姫」の詞章は「ゑがらの平太」と同文ではないので、この箇所の詞章は「中将姫」からの単純な流用とは考えられない。その背景には、迎講の名声と、このような詞章による語りものの流布を考えなければならぬであろう。

注26

『日本歌謡集成』第四に「中将姫号法如和讃」「中将姫和讃」が収められている。この和讃の成立年代は不明である。浄瑠璃や歌舞伎との詞章上の直接関係は認められない。

注27

青本に「中将ひめ」（刊年不詳 東北大学附属図書館狩野文庫蔵）、合巻に「藤中将姫藕糸織」（文化十三年刊 東里山人作 勝川春扇画）、「鶴山後日囀」（文化十四年刊 曲亭馬琴作 歌川国貞画）、ひばりやまはちすのいとおり「雲雀山蓮糸織」（嘉永元年〜安政四年刊 歌川貞秀作・画）などがある。

（付記）

（本学教授）

本稿の作成にあたって、吉田幸一氏より「異本中将姫物語」を御貸しいただき、閲覧することができました。ここに記して、御礼を申し上げます。